



3rd STAGE

男声合唱組曲「雪明りの路」

〈新月会・高等部グリークラブ合同ステージ〉

作詩：伊藤 整 作曲：多田武彦  
指揮：広瀬康夫

春を待つ  
梅ちゃん  
月夜を歩く  
白い障子  
夜まはり  
雪夜

## 男声合唱組曲「雪明りの路」〈合同ステージ〉

作詩：伊藤 整 作曲：多田武彦 指揮：広瀬康夫

### ■組曲「雪明りの路」の思い出 多田武彦

北村先生がアンコールで、曲目を告げないまま棒を振り始め、メンバーが「泣きやんだあとの様に……」と歌い出すと、客席から一斉に拍手が湧きおこる。日本のクラシックの演奏会では余り見かけない現象だが、この、「月夜を歩く」の曲に限って、拍手がおこる。

十六、七才の頃、私も月夜を歩くのが無性に好きだった。昭和20年に戦争が終って、その年の11月に、大阪の東住吉区に住み変えたが、翌年の春頃から、月の明るい夜、夕食後大和川の方へ向かって、歩き出す。さまざまな季節によって、霞がかかったり、蛙の合唱があったり、誘蛾灯が青白く光ったり、河内音頭が秋の夜風に流されて来たり、さまざまな光景が広がった。

昭和34年、関学グリーから二度の新曲を委嘱されたとき、「伊藤整先生が幼少の頃に過ごされた小樽のさまざまな姿」を描いてみようとして、「雪明りの路」に取り組んだが、最初に「月夜を歩く」が目にとまった。

「泣きやんだあとの様に／月が白い輪をもった夜更けて／私は……」のこの行は、実によくわかる。

「ひとり忍路の街を通りぬける／切通しをのぼりきれば／海に見えるさびれた家並みがある」—これは、東住吉区とはちがう。すぐに、私の心の中の撮影機が回りはじめ、映像化がおこなわれた。「灰色の背」「塩風でしろくなった板戸」「いたどりの多い忍路からでる坂路」が、感動を呼ぶ。そして、私がやったと同じように、伊藤先生も少年時代には、白い月を顔にあびて微笑まれた。

この組曲を歌った人たちの何人かは、小樽へ旅行し、月夜にこの、「いたどりの多い坂道」を歩いている。地球上の、覚えきれない人たちが、長い年月の間、月夜を歩いたとすれば、この行為は、どうも人間行動学の原点に近いところに位置するらしい。だから、ひとりでの、拍手が湧きおこるのだろう。

「月夜を歩く」に限らず、詩集「雪明りの路」に納められている詩群は、すべてが素朴で美しい。昭和35年夏、関学グリーの東京演奏会が共立講堂で催されたとき、関学グリーの招きにに応じて伊藤先生が聴きにこられた。

当時29才の私は、ひどく緊張して、おそろおそろ先生の傍の席に座ったが、この組曲にじっと耳を傾けられ、合唱音楽のすばらしさを話された。カメラをとり出して、そっとステージのメンバーたちを写したり、自由詩でも、立派に歌曲になることの新発見を喜ばれたりする先生をみて、まさにこの心の中から、詩集「雪明りの路」が出来たのだと、私は感動的に納得した。

伊藤先生との出会いは、生涯、たったこの一度だけ。しかしその清廉な横顔は今でも私の脳裡に焼きつき、この組曲の一つ一つが流れるたびに、北国に生まれ育った一人の大家の美しい魂を、しみじみと思い出す。

(第60回リサイタルパンフレットより転載)

### ■伊藤整先生から関学グリーへの手紙

昭和35年6月19日付の速達便が、関西学院グリークラブに届きました。詩と音楽に関する所見が、〈雪明りの路〉に関連して書き綴られていました。以下、原文の旧仮名遣いのまま全文を紹介します。

お手紙を拝見しました。

「雪明りの路」は私の二十歳前の詩を集めたものですが、口語形式の散文で、韻律を重視したものではありません。ですから作曲されることなどこれまでほとんど考へてみませんでした。それが、近年になって作曲される機会が少しつつあり、それは詩といふものの考へ方や歌謡の考へ方が変わったせみだと思ひます。先頃多田武彦氏からの手紙で「雨の来る前」が氏の手で作曲され、「朝日新聞」の全日本合唱コンクール課題曲に入選したことを知りました。また関西学院グリークラブの東京リサイタルで、同じ多田さんの作曲になる他の六篇が発表されるといふのは、私にとっては意外なほどのことです。あのやうな静かな感情を歌った詩が音楽として人に受け容れられるには、作曲がどのようになれるかといふことに重点がありませう。私はそれを聞いて見たいと思つてゐます。

もし私のあのやうな詩が音楽と協力できるならば、私は詩といふものを、それまでと違ったものとして考へることができるのではないか、と思ひます。大正初期に七五調、五七調などの定形律を詩が棄てて以来、日本の詩人たちは、ほとんど音楽との結びつきを放棄して来たのですから、問題は自由な詩形と音楽との関係といふことで起るのです。

それを考へるきっかけを今度の発表会で與へられるかも知れないといふのが今の私の感想です。

六月十八日 伊藤 整

この書簡は、当時のマネージャーが送った伊藤先生へのリサイタルの招待状に対する返信であるとされています。また同書は2012年5月小樽文学館へ寄贈され、大切に保管されています。